

月刊

いじろのとも

第六卷

三月号

人という字

人という字は

二人の人が

互いに支え合っている

ように見える

でも

現代人は

左側の

支えられる方には

なりたがっても

右側の

支える方には

なりたがらない

ラッパ水仙

道端の

ラッパ水仙

ただ一輪

人生を考え直して

みたい人は（十五）

『老子』解説（十四）

今月号は第五十八章を取り上げます。

（第五十八章）禍には福が寄り添っています。福には禍が隠れています。誰もそれが最終的にどうなっていくかを知りません。人が迷いはじめたのは、もちろん、今にはじまったことではないのです。

だから聖人は、自らは正しい道を体得していても他者が体得しないからといって、害し痛めつけたりはしません。自らは清く正しくても、他者がそうではないからといって、刀やまさかりで傷つけたりはしません。自らは真っ直ぐでも、他者を真っ直ぐにするよう、思いのままにしようとはしません。自らのところは明るく光っているのに、他者に対して照り輝こうとはしません。

今月号は、比較的やさしいと思います。読んで頂けれ

ば、言葉としては大体はお分かり頂けるのではないでしょう。でも、含まれる意味は深いものがありますので、少し説明していきます。

まず、出だしの「禍（わざわい）には福（ふく）が寄り添っています。福には禍が隠れています。」という部分ですが、この文を読んで、思い出されるのはキリストの言葉ではないでしょうか。それは『マタイの福音書』の5に、次のように記されています。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」

この他にも、続いて、いま禍があると思っている人は幸いである、という趣旨の言葉が述べられています。

私も、先月号の「釈尊のことは」の八頁〜十頁で、いま不幸だと思える人には幸せが待ち受けており、逆に、修行もしないのに、いま幸せだと思える人には「宿業」が、そんな傲慢な人をこそ、不幸へ飲み込もうと口を開けて待ち受けていることを述べました。

この出だしの文に続く「誰もそれが最終的にどうなっていくかを知りません。人が迷いはじめたのは、もちろん、今にはじまったことではないのです。」という部分ですが、初めの文は各個人が体験する禍福の顛末（てん

まつ)が、どうなるのか当の本人に分らないだけではなく、他の誰にも分からないものだ、ということを行っています。

続く「人が迷いはじめたのは、いまに始まったことではない」という文ですが、この部分はすこし分かりにくいのではないかと思います。

この「第五十八章」全体を理解する上で、この部分を理解することは、とても重要のように思えます。

それは、禍福が起こるのはなぜなのか、人が惑うのはなぜなのか、に關係しているからです。後半の段落の記述も、そのことをめぐって述べられているのです。

では、ある出来事が禍(不幸)であると感じられたり、福(幸福)であると感じられたりするのは何故なのでしょう。あるいは、人が迷うのはなぜなのでしょう。

それは、人間が相対的(相待的)存在だということに起因していると言えます。仏教で言いますと、あらゆる存在が縁起の中にあるということです。

私も何度も書いて来たと思いますが、人間は、二度とない人生を、この自分が、いま、ここに、一人(生まれるときも死ぬときも一人)で生きていると言えますが、しかし、だからといって、自分だけが孤立して生きているわけではありません。

相対的(あいたいしている)ということの意味は、自分(我)と他者(汝)とが、お互いに影響し合いながら存在しているということなのです。ところが、誰でもがするように、自分に執らわれて考えますと、他者は自分へ否定的に、邪魔者として働きかけてくるものと感じられてしまうのです。しかし、難しいことなのですが、自分への執らわれを捨てて考えますと、他者は自分を支えてくれている援助者としてあるのだ、と感じられるのです。そして、もしそのことを強く感じますと、他者は自分が支えさせて頂く、あるいは援助させて頂く有り難い存在と感ずることができるようになるのです。

人間は、こういう根本的な存在構造の中に生きているのですが、ところが、ややもすると現代人のように自分が一人で生きているように思ってしまうのです。実は、そう思えば思うほど、人間は外界への定位が出来なくなつて不安定になつて行きます。そうなりますと、外界の出来事が自分の存在をおびやかすものとして迫つて来るのです。そして、他者の支えばかり、あるいは援助ばかりが欲しくなつて来ます。

前述のように、この世は相対の世界ですので、お互いに依存しあいながら存在しています。ということは、相対なもの同士がお互いに依存しあい、定位置あつてい

るということです。ですから、その依存や定位はとても不安定になります。と言いますのは、相対なものは、時間的な存在だからです。生滅を繰り返し、移り変わっているのです。諸行無常です。人間で言えば、生まれたり死んだりします。病気になるったり、年老いたりします。私たちはお互いに、そうしたものでどうして依存しあっているわけですから、自分自身が死の不安に陥ったり、病気になるったり、年老いたりするだけではなく、自分が依存したり心理的に定位している人が、死んだり病気になるったり、気が変わったりするわけです。そうしますと、定位の対象を失ったり、失う危険を感じたりします。人は、そんなとき、とても不幸に思えるのです。ひどい時には、生きていく力さえなくしてしまうのです。

人間は何かに心理的に定位しなければ生きていけないのに、その定位する対象が相対的で不安定なものであること、現代のように経済的に豊かになり、科学や技術が発達し、個人（主義）が尊重されますと、人は自分だけで生きていくと勘違いしてしまい、逆に、定位する対象をますます必要とするようになって来ているということです。この二つのために、人は外界の出来事の一つ一つが、禍福であると感じてしまうのです。そして、心の中の無明の闇に迷ってしまうのです。

これまでに何度も述べたと思いますが、私たちは、無意識の中に仏さまや神さまを宿しています（如来蔵識）。その仏さまや神さまを磨き出し、それに定位しますと、神・仏さまは絶対で永遠で無限ですから、人は、心が安定しておれるのです。あらゆる出来事を、自分の生命さえも、おまかせして安心しておれるのです。失敗ということもなければ、不幸ということもありません。何があっても、それをそのままに受け取り、仏さまの思し召しと心から思うことが出来るのです。

そうなりますと、自分への執らわれがなくなって来て、欲望や情緒の統制が自由にできるようになります。そして、他者への援助が自分の生き甲斐と感じられるのです。

しかし、自分の中に宿した仏さまに定位することは、あたまで考えてできるものではありません。禅宗では「理屈を言う前に黙って坐れ」と言われるそうですが、まさしくヨーガ（瞑想・坐禅・読経）が必要なのです。自分の心を無にして仏さまを体感する経験が大切なのです。

それは、人間が、生まれながらに無意識の中にもっている、生きて行きたいという「生命蔵識」から発する衝動・煩惱と、仏・神さまへ定位せよ、と私たちに促して下さっているありがたい「如来蔵識」の働きとを無意識の中で統合することなのです。その時、誕生ののち成長

の過程で、一旦は如来蔵識を離れ「迷い出ざるを得ない無明の闇」から、仏さまの心の光りで照らされている明るみへと帰還することができるのです。

ところが、この偈にありますように、そうした統合がとれないで相対に定位し、無明の闇をさまよっている時、迷いの世界が最終的にどうなっていくのかは誰にも予測できません。また、そうした迷いの世界も、人類の誕生と共に始まっていると言えるのです。

後半の、聖人は自分の体得した道を他者に対して強要しない、という部分の解説に移ります。

前述の、無意識の中の生命蔵識と如来蔵識とが統合してきた、つまり道を体得した心理的境地（絶対な世界）を理解できるのは、その境地を体験した人だけです。それは、スキーをしたことのない人にスキーの醍醐味は理解できませんし、楽器を引いたことのない人にしびれるようなその魅力は分からないのと同様なのです。

ですから、道を体得した人も、体得しない人に自分の体験を分からずことは不可能なのです。ですから、自分の達した境地を他者に押しつけてみても、理解できません。口でこうだと言いますと、それで理解したように気になって、かえって修行の妨げになるのです。

では、なぜ老子が言葉を残したのか、ということが問

題になりそうですが、それは、道を体得していない人に、道の真実を説いて、道を体得したいと、動機付けたいからなのです。そうして、皆に道を体得して頂いて絶対な安心を得、絶対な幸せに至って頂きたいからなのです。

相対な世界にいるのに、相対だと気付けず、絶対の世界を求めようとする人は、相対であるが故の自己存在の不安定性を少しでも少なくしようと、食欲（物質欲）・性欲・優越欲をどこまでも満足させ、他者を否定し、自己の絶対化をはかろうとします。かつての支那の王のしたことやその墓は、一つの典型例をなしています。現代でも、その例をあげるのに苦労はしませんが。

しかし、道を体得した聖人は自己を他者に対して絶対化する必要はありません。自分自身で既に、絶対な境地に至っているからです。ただ、他者を幸せにしてあげたいと思う心から、間違いや悪に何度か忠告はするかも知れませんが、決して押しつけたりすることは無いのです。偈にありますように、他者を、害し痛めつけたり、刀のような武器で傷つけたり、思いのままにしようとしたり、自分の威光で恐れさせたりはしないのです。

宗教の名を借りて、どれほど多くのこうした行為が行われてきたか、また行われているか、老子の忠告に謙虚に耳を傾けたいものです。

自作詩短歌等選

人が自立するとは

人は自立すると
人を支えるのではなく
人から支えられる方に
まわりたがる

自分が
支えられて育ったこと
も
いま支えられていること
も
忘れて

ひばりのさえすり

散歩道
ひばり突然
さえすりぬ
なつかしきかな
田舎の春が

金貯めの垢

貯めたがりや
金は貯まれど
あかたまる

欲望追求

世界的な
麻薬による汚染
フリーセックスと
エイズの流行
アルコール依存症の増加
いまや
麻薬は
禁止ではなくて
中毒者には
国が与えて
保護するという
これらは
自己の
欲望追求と
それへの執着
そして
その公認

法句の花

(法句經四四)
この大地
誰が征服
するだろう
閻魔の世界と
神々と
共いませる
この世界
誰が征服
するだろう
花を摘むのに
巧みなる
人が上手に
摘む如く
善くも説かれし
この法句
誰が上手に
摘み集めようか

自作随筆選

愚衆政治

民主主義は、議論を尽くした後、最終的には投票行動を通じて多数決で、集団の意思が決定されます。

ということは、その意思決定は必ずしも「真」でないこともあり、「善」でないこともありうることを意味しています。つまり、その決定が「偽」であったり「悪」であることも起こり得るということです。

なぜ、そうしたことが起こるのでしょうか。実は、そうしたことが起こるのは、その決定が自分の「利害（欲望の満足・不満足）」や、自分の「好悪（快苦喜怒哀楽などの情緒）」に基づいている場合なのです。

そして、人間の多くの行動は、利害や好悪に基づいてなされる傾向をもっているのです。また、たとえ自分はその決定が嫌いで損（あるいは偽で悪）だと思っても、多くの人がその決定を主張するとき、それに逆らえないで同調してしまうという傾向ももっています。それは、人間は人（世間）から承認を得たいといった欲求（相対的存在として自己を安定させるために必要）があるから

なのです。こうした人間の習性のために、間違っていたり、悪いことであっても多くの人の意思として決定され、実行されます。ここに民主主義の最大の欠点があります。こうした欠点は、真や善を追求する大学においてさえ、日常茶飯事に経験されることなのです。

いま、人類は全体として、ますます自分の利害や好悪への執らわれを増やしていつていきます。何千年も前の民族的怨念がまだ解消されず、戦争の種を提供しています。人種間や宗教間の対立はますます激化していつていくように思えます。個人間だけではなく、国際間の経済的利害の対立も解消されるどころか、ますます激しさを増しています。また、個人一人一人も、自己を絶対化し、自己に閉じ、傲慢になって、他者への配慮も正しいことの判断も出来なくなつて行つていきます。こうした精神の病理現象は、特に子どもたちの凶悪犯罪の増加や低年齢化、精神的健康の喪失として現れて来ています。

こうした人類全体としての執らわれの増加は、人間には他者を無視しても、自分たちだけの利害や好悪だけで真偽や善悪を決定する傾向があることを意味していると言えます。その典型的な例は、利害や好悪に基づくイデオロギーが存在することです。そして、そのイデオロギーを真とし、善として全ての判断をする例です。しかし、

それは結局、真偽や善悪を利害や好悪に還元することを意味しています。ですから、多くの行為が間違っただものとなつていきます。

前述のような執らわれをもつ人々の多くが是認するところが「真」であり「善」であるとする、いまの民主主義では、こうした間違いを避けることはできません。

いま、人類が核兵器を持ち、多くの有害な化学物質を作りだし、遺伝子を操作できるようになった現代に、こうした間違つた行動をすることは、いつでも人類が滅亡に至る危険性を孕んでいることを意味しています。

この民主主義の愚衆政治を避ける道は、多くの人が利害や好悪を真偽や善悪に還元しなくなることです。それは、人々が利害や好悪への執らわれを捨て、善や真を尊重することができるようになることです。しかし、それはとても難しいことです。それを可能にする道は、歴史上の記録に残る最初の四聖人である、ソクラテスと釈尊と老子とキリストの教えを統合していくことだと、私は思えるのです。なぜなら、これらの人たちはみんな自己の利害や好悪への執らわれを捨てていたからです。

こうした人たちの説いた真の宗教のみが、人間が成長の過程で付けてしまう「心の執らわれの垢」を捨てる道を、実際のものとして、示しえると思えるのです。

釈尊のつとば（三三三）

法句経解説

（一二四）もしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去ることもできるであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない。

この偈を読んで、日本にもこれに似たことわざがあることを思い出します。それは「すねに傷もつ身」とか、「すねに傷あれば笹（ささ）原走る」というものです。前者は、隠している悪事があるという意味であり、後者は、隠した悪事のあるものは、笹のそよぐ葉音にもびくびくして、小走りに逃げ足で通り過ぎていく、という意味です。

「自作随筆選」でも書きましたように、いま多くの人は、自己に閉じ、人の心を感じるころを鈍麻させ、自分の欲望や情緒への執らわれを増やしています。そして、人間が欲や情緒を満足させようとするのは、人間の本质として当然であつて悪いことではないと合理化し、悪を平気で犯します。政治家を筆頭に企業家や役人など、この職業の人は悪事をなさないという職業の人はいないよ

うに思われます。もちろん、私の仲間である大学の教員もこの例外ではありません。彼らは、日常的に自分が悪事をなしていることにすら気付けないほどです。

しかし、そうした人たちもどこか無意識のうちにも、何かしらうしろめたさを感じ、不安にさらされているのです。ですから、自分の欲望ばかりを追求し、真に自分の人生をいきいきと生きていくことができません。創造的な仕事もできず、怠けて、権力者にゴマをすつていきます。そして、権威のない、自分が権威をふるえる者には、精一杯威張り散らしているのです。そうしたことをすることによって、やっと不安から救われようとしているのです。でも、そんなことをすればするほど、ますます不安に陥っていることにも気付かず、哀れなるかなです。

この偈にありますように「傷のない人に、毒は及ばない」のですが、これまで見てきましたように、現代人は皆、悪を犯し、心に傷をもっているように思えてしまいます。そして、その傷を「不安」(キルケゴールがいう不安)の毒がおかしているのです。不安の毒が身体中にまわり、その不安から救われようとあがき、多くの悪をなしてしまうのです。

毎日々々、欲望(食欲(物質欲)・性欲・優越欲)や快苦に執らわれていないか、そのために悪を犯していない

いか、常に反省し、悔い改めたいものです。なんと悔い改めても悪をなしてしまう人(大多数そうだと思います)は、自分の業に気付कि、その業から抜ける修行をして頂きたいと思えます。

(一二五) 汚れの無い人、清くて咎(とが)のない人をそこなう者がいるならば、そのわざわざいは、かえってその浅はかな人に至る。風に逆らつて細かい塵を投げると、(その人にもどつて来る)ように。

昨年十月号に次の詩をのせました。

凡聖逆謗(ぼんしょうぎやくぼう)

凡なる者も

聖なる者を

非難する

ことができる

偈の「汚れの無い人、清くて咎のない人」とは、聖なる人、解脱に達した人ですが、いま、そうした人が殆ど価値を持たなくなつて来ています。「聖なる者」という言葉自体が、殆ど死語になつて来ています。

ということは、そうした人の理解も自分の水準に引きずり降ろして理解しようとしているということ。それも、いわゆる仏教学者と呼ばれる、有名な人たちがそうしているのです。自分を超えた人を自分の水準に引き下ろして、「あたま（理性）」だけで、「こざかしく」理解するわけです。ですから、正しく理解できるわけがありません。でも、自分では正しく理解したと思っっているのですから、始末におえません。理解できませんと、釈尊のされたことを非難さえするようになって行くのです。（いま解説しています『老子』も、まだ出会っていませんが、非難する人はきつと思えます。いつも書きますように、なにしろ、学者で正しく理解する人にも出会っていないのですから。なお、ソクラテスを非難する人には、最近、出会いました。）

自分に閉じ、理性に閉じた現代人には、聖なる者も自分と同等な者なのです。俗なる者と変わらない者として理解されているのです。なんでもが理性的に分かっている、あるいは分かり得ると思っっている現代人にとって、聖なる者は、俗であるのに絶対なる自分と、何ら変わらないものなのです。そこには、聖なる者への畏敬の念はありません。せいぜい、絶対な自分に閉じて、自分の先祖の霊の供養をする程度なのです。しかし、そ

れはどこまでも自分に閉じたものなのです。

こうして、聖なる者を俗にまみれさせ、非難しないまでも、せつせと欲（金儲け、自分に閉じた先祖供養の執行人・葬式屋、観光仏教屋、解説仏教屋）の手段として利用するようなことをしていますと、偈にありますように、そのわざわざいは必ず自分にかえって来るのです。天に向かつてつばを吐くようなものなのです。

（一二六）或る人々は（人の）胎に宿り、悪をなし
た者どもは地獄に墮ち、行いの良い人々は天におも
むき、汚れの無い人々は全き安らぎに入る。

これは輪廻について述べたものです。皆さんもご存じの方が多くと思いますが、仏教では六道輪廻の思想があります。それは、人間を含め命あるものは死んだらどこかに生まれ変わりますが、どこに生まれ変わるかを決定するのは、この世の行い（業）によって、決まるとする考え方です。そして、その生まれ変わる場所（世界）として六つがあるとするのです。それは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六つです。

この偈にあります「或る人々は人の胎に宿り」という部分は、人に生まれ変わることを意味しています。次の

地獄に墮ちると、天におもむく、のはそのまま地獄と天です。最後の「汚れの無い人々は全き安らぎに入る」という部分ですが、これは少し解説がないのではないかと思います。実は、この六道のどこに生まれ変わっても、例えば天界であっても、再び輪廻してどこかに生まれ変わらなければなりません。永遠に輪廻して、どこかでまた苦しまなければならないのです。それがインドにそれまでにあつた輪廻の考え方なのです。

釈尊は、この輪廻から救われる道を示されたのです。それが、この偈の最後の部分の「汚れの無い人々は全き安らぎに入る」という部分なのです。

この全き安らぎとは、悟りの境地で、仏教では涅槃寂靜と言っています。こころの真の安らぎのことです。

ところで、現代では人間が即物化してきて、この六道輪廻を信じる人は少なくなってしまうのではないかと思うのですが、最近、霊界の話を書いた本が売れていると聞きます。

かつてはスウェーデンボルグ（一六八八—一七七二）というスウェーデンの人が、生きているのに霊界に行ってきたと言い、その体験と称して何冊も本に著し、話題になりました。そこで、哲学者のカント（一七二四—一八〇四）も、乏しいお金をはたいてその高価な全集を買

って読んだといひます。その批判が『視霊者の夢』として出版されました。なお今も、スウェーデンボルグの訳本は、日本でも何十冊も出版されています。

このように、霊界の話は今に始まったことではないのですが、最近、悪霊を清めるとか、死後の霊とか、死んで霊界に入るとか、といった霊のことが本に書かれて、結構売れるようです。私には、科学的な現代人が、個に閉じて外界へ定位できなくなり、非科学的なものを信じるようになった一つの証拠のように思えるのですが。

釈尊のように、死後の世界のことを、現世をより善く生きるための方便として語るのには大切だと思うのですが、それは、どこまでも解脱（絶対な幸せ）へ誘う方便であつて、解脱すれば本当はそんなことはどうでもよいことなのです。

読者とのコミュニケーション

俳句

曝されし木の芽ようやく形つくる

春疾風あくた残して波帰る

天守閣のこして町は本がすみ

（徳島県・須藤一樹）

後記

一、今回の『老子』は、本文はやさしかったと思うのですが、解説が少し難し過ぎたかもしれません。なんとかやさしくと努力したのですが、紙数の制限もあり、限界でした。申し訳ありませんが、何度か読みなおして頂ければ幸いです。含まれた内容は、結構、濃密なものがあると思います。読み直すごとに理解が深まり、きつと何かをくみとって頂けるものと確信します。

二、その、分かりにくいことの一つに、五頁で書いています、「自己を絶対化する」ということがあるのではないかと思います。本文では、支那の王の例をあげましたが、補足のために、もう一つ別の例をあげておきたいと思えます。

三、それは、ヨーロッパ中を征服したフランスのナポレオン（一七六九 - 一八二三）についてです。彼は、「自分の辞書には不可能という文字はない」といったと伝えられています。一方では「敵に勝つのはやさしいが、己に克つのは難しい」と言ったとされています。

四、この前者の言葉が、自己の絶対化を表すものなので。万里の長城を築いた支那の王（秦の始皇帝）もおそらく自分に不可能なことはなかったのだと思います。敵を制圧し、国民をひれ伏させ、あらゆる欲望を満足させ

ることができたのだと思うのです。しかし、人間はそんなことをしても、決して「真の幸せ」にはなれません。それは後者の言葉が表しています。

五、つまり、そんなことをしても、自分に克つことは難しいのです。ナポレオンはしまいに戦いに破れ、その時は前者の言葉も空しいものになったと思います。支那の王は天寿を全うしました。でも、己の死には克てなかったわけで、死にたくないところが、馬鹿げた墓を作らせ、多くの人を殉職させて、死んでいきました。人間は、自己を絶対化するほど、自己を定位するものがなくなり、不安になっていくのです。現代人のように。

月刊	平成七年三月八日
こころのとも	〒772 8502
第六卷	徳島県鳴門市鳴門町高島
三月号	鳴門教育大学 障害児教育講座気付
(通巻 六十三号)	(ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	